

【コラム】山道具、今昔（第4回） テント、ザックなど

前3回ではピッケルなど登攀ギア類について書いたが、今回は衣食住の山道具について書いてみたい。

まずはテントから。今ではテントは強化ナイロン製の軽くて風雪にも強いドーム型がほぼ100%であるが、かつては重くて防水機能がない綿製の三角屋根テント（ウィンパー型）が主流であった。軽いナイロン製の物もあったが、これは高価であったので専ら重い綿製を担いだものだった。濡れると水タンクを担いでいるくらい重くなった。また、ポールは木製であったので、継ぎ目が腐ってきたりして強風に叩かれるとヘシ折られるシロモノであった。屋根が三角形なので居住性も良くなかった。

やがて、雪山用カマボコ型と称されるテントが出現した。ナイロン製でフレームはグラスファイバー、内側に内張を張った二重構造で寒気を防ぎ、入り口はチャックではなく吹き流しになっていて洒落ていた。三角屋根に較べると中が広く使えて居住性も良かったが、何故か余り普及しなかったようだ。



(ウィンパー型)



(カマボコ型)

“部屋”の序に“寝具”をひとつ。

今ではダウンの軽量シュラフが普通であるが、数十年前は重い中綿シュラフが一般的であった。50年ほど前にアメリカ進駐軍放出品の兵士用羽毛シュラフが、今の秋葉原のニッピンの前身のナントカいう店で販売されていた。「アメ^{チュウ}中」と呼ばれる代物で、US ARMYのラベルが貼られていた。中古品ではあったが、比較的安価であったので注文して送って貰った。巷の噂では、朝鮮戦争で死亡した米国兵士を日本に移送した際に遺体を包んでいた寝袋だったそうで、所々に血痕などの跡が付着しているとの噂であった。そのような目で見ると確かにシミのような汚れもあったが、寝ている時に兵士の亡霊にうなされるようなことは無かった。今のようなふかふかのダウンではなく羽骨がゴツゴツしたような羽毛ではあったが、綿製に比べれば軽量であった。ただ、縫製が悪かったのか、縫い目から羽毛が抜け出てテント中が羽毛だらけになったり、シュラフの羽毛の量がドンドン減っていったりしたものだった。

次にザックについて。

年配の方なら「カニ族」という言葉をお聞きになったことがあるだろうし、またご自身がカニ族であった方も多いかもしいない。当時のリュックザックはキスリングと称する横長のザックが主流であった。後ろから見るとカニが歩いている姿に似ていたのでこのように呼ばれた。帆布で出来ていて色も概して茶色であった。両サイドに大きなポケットが付いていて“タッセ”と呼んでいた。水のポリタンクなどはこのポケットに仕舞っておいた。横長なので、狭い樹林帯などではタッセが木の枝などに引掛かって歩きづらいものだった。やがて、縦長のアタックザックと称する今様のザックが出回り始めたが、私はこのキスリングを20年ほど前迄は使っていた。片桐という帆布メーカーの製品であった。

キスリングというのはアイガーやユングフラウの登山口であるスイス・グリンデルワルトの馬具やカウベルの首輪を作っていた職人で、ガイドからの要求でザックも作っていた。

アイガー東山稜初登攀の榎有恒がこれを持ち帰り、「片桐」に製作を依頼して以来、「片桐」は創業100年になるそうだが、この間日本山岳会のヒマラヤ遠征隊や南極観測隊のザックやテントを開発してきたそうだ。現在も細々ではあるが、帆布製キスリングとクレッターザックを販売している。全て手造り注文生産なので注文してから半年ほど待たなければならないそうだ。

話は飛ぶが、ピッケル・アイゼンの「門田」、登山靴の「たかはし」、ザックの「片桐」は、50年前は本邦の登山用具の御三家と言われた。この三種の神器を身に付けていると、如何にもベテランになった気がしてきて、他人に見せびらかしたくなったものだった。

次に炊事用具に触れておきたい。

登山用のガスバーナーと小型ボンベが発売されてから山での炊事は一気に楽になった。バーナーもボンベも軽い物だし、自動点火装置で点火も簡単、かつ燃料の厭な匂いも無い。かつては、山での炊事と言えば、飯盒炊爨に代表される焚火であって、雨の中でも雪の中でもマッチ1本で生木の焚火が出来るように訓練したものだ。やがてガソリンや石油の山用ストーブの使用が一般的になり、テントの中で煮炊きができるようになって雨の日などは大助かりとなり、雪山ではテントの中の暖房にもなった。

私が使っていたストーブはオーストリア製のホエーブスで、燃料はガソリンであった。タンクにポンプで高気圧を掛けてガソリンを吹き出し、これを熱したノズルで気化して火炎を噴出する仕掛けになっていた。ジェット機のようなゴーゴーという燃焼音がして、非常に強い火力が得られた。ただ、ポリタンに入れたガソリンを持ち運ぶので、ザックの中で漏れたりして匂いが食料に移って往生したし、ガソリンに引火しないように気を付けなくてはいけなかった。ケースには湖畔でBBQを楽しむ水着のカップルや、家族がピクニックに出掛けて料理を楽しんでいる絵が描かれていて、ヨーロッパのレクリエーションはこんなに贅沢なのかと羨ましかった。

マナスルという日本製石油ストーブもあったが、煤でノズルが詰まって消えることが多く、ノズルの掃除が大変だった。マナスルは今でも販売されている。(次回は尻皮などの予定)



(現在の片桐の背カンの刻印)



(おおつか)